

No.101 松田 重仁 「浮遊する水」

Shigehito Matsuda

北川フラムさんのコラム / 1996 (平成8) 年5月1日付 立川市市報記事より

松田重仁は木彫りの作家だ。

ファーレ立川の「浮遊する水」と題された作品も、最初は木で彫った。それを鑄型^{い が た}でとってブロンズにし、道路脇に据え付けた。だからこの作品には刀で彫った跡がはっきり分かる。

この作品は水に浮かぶ木の実のように見えるが、それは作家が作品に託した生命あるものへの讃歌^{さんか}で、制作時に三千五百年も前の古層から発掘されたハスの実が花開いた事実を思い浮かべていたのかも知れない。

ブロンズで作られた硬い木の実の中に凝縮された生命のエネルギーは、この町の未来に託したメッセージのように思われる。

作家のメッセージ / 日本住宅公団 (現 : UR 都市機構) 「ミニ通信」より

人間が物を作ることは、自然の欲求の一つであり喜びにつながる行為だと思う。

しかし、作品となるとややもすると苦痛に満ち、難解なものへと移行していく。

それに伴い、創造者の内側では、アドレナリンの分泌が激しさを増し、この世とは思えない恍惚状態へと導かれていくのである。

しかし、事が終わり全てが白日の下にさらされた時、すでにあの素晴らしい世界は夢のかなたに消え去り、行為の残骸だけが現実の姿として人々の目の前に置かれるのである。

その内に、夢の跡を感じる<もの>は幸いである。また、そこに喜びを見いだせる<もの>はなおさらである。

一つの実^みは現在のタイムカプセルである。遠い太古の彼方から現代に送られ花咲く植物もある。20世紀末に生きる私たちは、次の時代に何を託すのだろうか。

古代ギリシャの哲学者タレスは言う「万物は水から生まれ水に帰る」と。

もし、彼に何かを託したとしても、それが命の水を与えられるまで、植物の実のように生き抜くことができるのだろうか。

今、万物の源である水が浮遊を始めてしまっているのに・・・。